

P1-37

当院「女性のための骨盤底ケア外来」における患者指導の検討

岐阜赤十字病院 看護部¹⁾、岐阜赤十字病院 泌尿器科²⁾

○西垣 亜衣子¹⁾、三輪 幸¹⁾、上原 里枝¹⁾、鈴木美奈子¹⁾、伊藤 裕基²⁾、守山 洋司²⁾、三輪 好生²⁾

【目的】当院ウロギネセンターでは、骨盤底ケア外来で患者の個別指導を実施している。今回、行動療法統合プログラムを作成し患者指導を行った結果をもとに、その効果について検討を行った。

【対象・方法】2017年3月から11月までに当院「女性のための骨盤底ケア外来」を受診した115名のうち指導前、指導後3ヶ月目に質問票に回答できた71名(平均年齢66.6歳)を対象とした。行動療法統合プログラムによる指導後3ヶ月目に自覚症状改善の評価としてPGIIを調査した。また過活動膀胱に対してOABSS、腹圧性尿失禁に対してICIQ-SF、骨盤臓器脱に対してP-QOLを指導前、指導後3ヶ月目に調査した。

【結果】疾患の内訳は骨盤臓器脱36名、過活動膀胱21名、腹圧性尿失禁31名(重複あり)であった。指導後3ヶ月目のPGIIにおいては改善(1~3点)45.1%、不変(4点)47.9%、悪化(5点)7%であった。疾患別の改善率は骨盤臓器脱が36.1%、腹圧性尿失禁が61.3%、過活動膀胱が66.7%と過活動膀胱で最も高く、骨盤臓器脱で低い結果であった。OABSSは8.0から5.8(p<0.01)、ICIQ-SFは10.3から7.7(p<0.001)と有意に低下していた。P-QOLにおいては心の問題のみ45.4から33.3と有意に改善していた(p<0.01)。

【考察】当院骨盤底ケア外来において、行動療法統合プログラムを用いる事で、過活動膀胱、腹圧性尿失禁に関して高い改善率が得られた。個別の指導メニュー、説明用資料を組み合わせて使用することで、患者の理解度が増し、より効果的な指導を行うことができた。骨盤臓器脱に対する指導に関しては予防的要素が強いことを理解してもらい継続することが重要と思われた。

P1-39

白内障患者へのアンケート調査から患者指導の充実を目指して

福井赤十字病院 看護部

○常見 いずみ、山内保奈美、松山 沙生、加藤 沙季

【はじめに】A病院のデイサージャリー室で白内障手術を受ける患者は、日帰り手術患者と入院患者の2通りがある。そこで、日帰り手術患者と入院患者それぞれにアンケート調査を行い、それぞれの患者の満足度と患者ニーズを明らかにし、患者への指導内容の検討を行いたいと考えこの研究に取り組んだ。【目的】 デイサージャリー室で白内障手術を受けた日帰り手術患者と入院患者にアンケート調査を行い、それぞれの患者の満足度と患者ニーズを明らかにし、患者への指導内容の検討を行う。【方法】自作の質問紙を作成し、分析方法は単純集計を行った。倫理的配慮はA病院倫理委員会の許可を得て実施した。【結果】入院・日帰り手術の選択に関する説明は、入院患者の100%、日帰り患者の98%が「選択した手術が良かった」と答えた。看護師の説明に関しては、入院患者の100%が、日帰り患者の98%が「看護師の説明はわかりやすかった」と回答し、バス用紙に関しては、入院患者の100%が、日帰り患者の98%が「わかりやすかった」と回答した。術後日常生活の不安に関しては、入院患者の27%が、日帰り患者の22%が「不安があった」と回答している。自由記載においては「眼帯がつけられずに困った」「今後の長期スケジュールを教えてください」「術後痛みがあったが、適切な内容を指示してもらえないため、不安だった」等の意見があった。【考察】 デイサージャリー室で白内障手術を受けた入院・日帰り患者両者とも満足していることが明らかになった。自由記載において1.眼症状の対処方法 2.日常生活上の細部の注意点 3.術後の長期的経過について不安を抱えていることが明らかになった。今後はこの点に留意しバスの追加修正を行い、患者のライフスタイルに合わせた指導にあたっていきたい。

P1-41

糖尿病教育入院をきっかけに自己管理能力向上に繋がった症例

石巻赤十字病院 医療技術部栄養課¹⁾、糖尿病内科²⁾

○奈良坂佳織¹⁾、佐伯 千春¹⁾、佐々木亮子¹⁾、武山 みほ¹⁾、佐藤 倫子¹⁾、佐々木大岳¹⁾、杉村 和彦²⁾

【はじめに】当院の糖尿病教育入院は8日間、管理栄養士の関わりは栄養指導、患者と共に病院食を摂るディールーム会食である。栄養指導は入院4日目に実施し、さらに退院前日に栄養指導時の目標の復習を行う。また退院後最初の外来では自宅での食生活確認の為に必ず栄養指導実施、さらに外来受診の度に継続介入を行い食事療法が実行出来ているか確認を行っている。今回、外来通院中はHbA1c低下や体重減少が難しかった患者が糖尿病教育入院をきっかけに行動変容がみられ、データ改善した症例について報告する。【症例】50歳、男性。1型糖尿病、病歴30年。身長176cm、入院時の体重121.2kg、BMI39.2kg/m²、HbA1c11.9%。指示エネルギーは2000Kcal。入院前のインスリン合計152単位。【結果】入院時から退院時までの8日間で、体重4.9kg減。インスリンは100単位減。退院約1ヶ月後の初回外来、退院約2か月後の退院後2回目外来時のHbA1c・体重は各々9.3%・92%、116.2kg・113.0kgであった。【まとめ】入院中の栄養指導では自宅の食事と病院食との違いについて確認。主菜の量が病院食の2~3倍と過剰。また、脂質が多い食品や料理が多い事が挙げられた。病院食を摂りながら、適量や調理法等を確認し習得。退院後は病院食を参考にしたいと、意欲的な姿勢がみられた。教育入院中は大幅にインスリンを減量でき、また体重減少した事により、自宅でのご飯以外の食事摂取量がいかに多かったかを自覚し、退院後の食生活改善に繋がった。

本症例は糖尿病教育入院をする事により病院食を通じた正しい食事内容を勉強しかつ実際に体重減少やデータ改善があった事から自己管理に意欲的になり、さらに外来でも栄養指導継続する事により知識を実践に繋げた事ができたと考えられた。

P1-38

初回発症の2型糖尿病患者への継続したフットケア指導方法の検討

福井赤十字病院 内分泌内科 1-7病棟

○高田 瑛美

1. はじめに 毎年約1万人以上の患者が神経障害による足病変の重症化で下肢切断をしているが、その原因の第1位は糖尿病によるものである。糖尿病患者は高血糖状態が続くことで動脈硬化になりやすく、足病変の発症率は非糖尿病患者の3~5倍と高い。足病変を予防するためには、糖尿病重症化の予防と患者自身がフットケアの必要性を意識して、継続したセルフケアができるように支援していく必要があると考えた。本研究では患者が継続したフットケアを実践できるように指導方法の検討を行った。

2. 方法 初回発症の2型糖尿病入院患者10名へフットケア指導前・指導後・退院後外来再診日の計3回、アンケートでフットケアに対する意識調査を実施した。フットケアに関する意識調査をもとに指導方法の検討を行った。

3. 結果・考察 今回の研究では、入院前から患者自身が糖尿病に関する自己学習を行っていたためか、合併症について理解している患者は多くいた。しかし、ほとんどの患者がフットケアに関する知識は不十分であった。入院中に患者参加型の指導を行ったことで、フットケアの必要性を自分自身の問題として捉え、自分に必要なケア方法が分り、実践できるようになったのではないかと考える。入院中には、定期的に看護師と共に実際の観察を行うことで患者自身もフットケアについて関心をもつてきた。しかし、外来アンケートではフットケアに関する意識が低下していることが分かった。これは日常生活の中でフットケアの優先度が低下している事や、ケアの確認者がいない事などが考えられる。定期的な外来受診を通して継続した支援をすることが、フットケアに対する意識の向上になり、足病変予防につながっていくのではないかと考える。

P1-40

腹膜透析導入患者への自己管理指導方法の検討

福井赤十字病院 看護部

○近葉 美咲、布谷喜代美

【はじめに】腹膜透析を導入した患者の自己管理行動取得のためのよりよい指導方法を検討する。【事例紹介】A氏、60歳代、女性。長男夫婦、孫と同居。慢性腎不全で腎機能低下のため透析が必要となり、腹膜透析(以下CAPDとする)導入となる。CA PD開始と同時に自己管理の指導を開始した。【看護実践と結果】1) 手技の指導。2 回目目のバック交換からA氏に参加してもらい、できていない事よりもできた事に焦点を当ててA氏に伝えるようにした。「覚えられない」と言っていたA氏だが、指導開始6日目には習得でき、表情も明るくなった。2) DVDの視聴。退院後を具体的にイメージできるような他のCAPD患者の生活が描かれたDVDを視聴してもらった。その後、自宅でのCAPDの実施方法についてA氏と検討した。3) 記録表記載とトラブル対応指導。記録表は文字を大きくし、観察結果は選択肢から選んで記載できるなど、A氏と相談しながら修正し作成、記録方法を指導した。退院後のトラブルへの対応方法も指導。4) 家族への指導。長男へCAPDの手技を説明し指導した。A氏はCAP D導入から22日後に退院。退院3日後に体重増加に気づき、受診し利尿剤の投与を受けたが、A氏からは「今まで通りの生活ができ、CAPDにしてよかった」との言葉を聞くことができた。【考察】できた点に視点を置いて伝える指導は、手技習得に自信がなかったA氏の自己効力感を高め手技習得を促した。DVDの視聴は、退院後の具体的な生活イメージ構築に有効であった。また、これは代理体験ができ、自分もできるかもしれないという自信につながった。さらに、A氏に合わせた記録方法をすることによって自宅でも記録を継続でき、自分の病状とCAPDの管理ができ、異常に早期に気づき、受診行動を取ることができた。

P1-42

成長ホルモン自己注射キャンプの開催

芳賀赤十字病院 医療技術部栄養課

○山口真由美、栗畑 江実、増田 卓哉、齋藤 真理、菊池 豊、深谷 亜矢、飯村加奈美、小谷 晶子、寺崎 祥子、小山 美雪

【目的】成長ホルモン補充療法(以下GH補充療法)は治療が長期に渡るため、患者、家族が治療を継続するための支援が必要であり、特に本人が注射するよう促すことが重要である。GH補充療法を行う仲間との交流の機会(自己注射キャンプ)を提供し、本人が注射するよう促すこと。【方法】対象は当院でGH補充療法を受けている45名。外来受診時に担当医から説明を行い、また、ポスターを掲示し開催の啓発を行った。栃木県東健康福祉センターに趣旨説明し、小児慢性特定児童等自立支援事業の対象となり開催となった。プログラムは以下の通りである。1. 医師からGH補充療法の必要性、GHの作用機序の説明。2. 管理栄養士から成長を促す食事の説明。3. 成長を促す運動の実施。4. 看護師による練習機を用いた自己注射手技の確認。5. レクリエーション。6. アンケート。【成績】参加者14名(男子5名、女子9名)。年齢は5歳から15歳(平均9.5歳)。疾患の内訳は成長ホルモン分泌不全性低身長9名、軟骨形成症4名、ターナー症候群1名。4名のみ本人が注射をしていた。支援者側の参加は医師3名、看護師4名、管理栄養士2名、事務担当者2名、栃木県職員3名。医師からのGH作用機序の説明は、理解が困難と考えられたため、分子構造をボールに例えた。管理栄養士からは成長に必要な栄養素の知識を馴染みキャラクターを用いて説明した。看護師による手技確認は、本人を対象として自己注射手技を実際に行った。【結論】GH療法を受けているのは自分だけではないことを知り、さらに、自ら注射をしていると関わることができた。本人が注射できるようになったかは今後検討していく。栃木県から継続して人的、金銭的補助が受けられる様になり、今後も開催を継続する予定である。

11月15日(木)
一般演題(ポスター)抄録